

夕べの祈り

詩編四編

平安のうちに、私は身を横たえ、眠ります。主よ、あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。(9)

一日のわざを終えて夜の眠りにつこうとするとき、主の御手に全てを委ねる祈りをささげて一日を閉じることの幸いが語られています。しかし、詩人の置かれている状況は厳しく、嘆き、苦しみ、怒りなど様々な思いが彼の心を覆っていました。それでもなお、彼は神に信頼して祈りをささげます。その祈りの中で、詩人は目の前の状況から目を離し、祈りを聞いておられる神に目を向け、信頼を寄せます。この神への信頼は、彼の心を一変させます。困難のただ中で、豊かな食物にまさる喜びと平安が心に訪れました。静かな喜びと平安に包まれて、彼は安らかな眠りにつくことができたのです。一日のわざを終えて床につくとき、さまざまな思いに心乱されることがあります。そのときこそ、真実なる神に心を向けましょう。私たちも静かな平安に包まれて休むことができるのです。